

スタッフルーム
Staff room

白楽サテライトライブラリーでの「出逢い」

ねもと としえ
根本 利枝

(湘南藤沢メディアセンター)

慶應義塾大学メディアセンターの外部書庫であった白楽サテライトライブラリー（以下「白楽SL」とする）が2016年3月に幕を閉じた。ここに常駐スタッフとして16年勤務していた間に「出逢ったこと」について振り返ってみたい。

場所は横浜市営地下鉄岸根公園駅または東急東横線白楽駅から徒歩圏内であった。立地条件は良い（横浜市神奈川区）が目印になるものが少ないため、道を尋ねてくる電話が多かった。ある時は「何処にいるか分からなくなりました…」と言われ、思わず「西方向に向かってください」と答えたところ「方角が分かりません」との答え。これではどうかと「太陽が昇っている方角が南です！」で無事到着。今でこそスマホの便利な地図アプリがあるが、開館当初は紙の案内地図を片手に訪れる人がほとんどで、アナログ対応を行うしかなかった。

白楽SLまで資料を求めて来る利用者は、自身のテーマに沿って深い学びをされている方々で、まさに「故きを温ねて新しきを知る」という精神の持ち主だった。とかく新しいことに目が行く時代ではあるけれど、古きことから得る重要性を教えられた気がした。利用者の年齢層は広く、10代から80代までさまざまであった。いくつになっても学ぶ姿勢の大事さを目の当たりにし、頭が下がる思いだったことを今でも覚えている。保存書庫ならではの対応が、一味違う人との出逢いを生むこととなった。

書庫には、出版年が古く利用が少ないものの約50万冊が、各キャンパスのメディアセンターごとにエリアを分けて請求記号順に配架されていた。その中にはとても貴重な資料があったため、扱いに気を配り1冊1冊の歴史と劣化を気にしつつ、利用があると喜んで送り出した。出版年が古いものには、しばしば赤鉛筆での書き込みが見つかり、時代を感じながらひたすら消していく作業を行った。これらの資料が長期に渡り慶應義塾で保存され提供できる環境にあったことを、改めて「すばらしい」と感じる。

書架は手動式の集密書架（図1）で閉架式のため、本を出納するのはスタッフの仕事であっ

た。ある時、児童書の中に半世紀以上前（古い話だが）に読んだ中川李枝子さん作の童話を見つけた。大村百合子さんの絵が印象的な代表作である。赤い表紙に魅了された幼少時代を思い出し、再び手に取ってしばらくと捲ってみた。この後、わが子の時代には中川李枝子さん作の『ぐりとぐら』が流行った。長きに亘り世代を超えてお世話になった絵本である。あれから手にすることができなかった1冊にまた出逢い、懐かしさとともにほっこりとした気持ちになった。



図1 白楽SLの集密書架

白楽SLの名物といえば、車1台が入りそうなエレベーターである。大掛かりな移管作業の際はとても活躍し、スムーズに作業を行うことができた。なかなかお目に掛かることができない広さだった。

最寄り駅の白楽駅や岸根公園駅周辺には、レトロな商店街や千紫万紅の花が咲き乱れる公園、所蔵していたレファレンス資料にも掲載されていた古書店などがあり、散策するには面白い。白楽SL界隈で、幾つかの名所との出逢いがあった。

そして現在はというと、白楽SLの建物は跡形もなくなった。山中資料センターへ住まいを移した資料のことが懐かしく思える。今となっては過去の話となるが、このような場所があり、そこで経験したいくつかの「出逢い」が私自身の活力になっているのは確かだ。縁があって通い続けた場所で、意味のある貴重な時間を過ごしたことに感謝したい。

最近では、8歳のお城好きな孫に会うと「大きくなったら図書館でお仕事したら。お城のこと、たっくん調べられるよ。」と眩くようになった。